

言語学 The Sansendo
Encyclopaedia of
Linguistics 大辞典

第1巻
【世界言語編】

上
あーこ

三省堂

発売記念特別定価——38,000円 [1988年12月31日まで]

定価——42,000円

ISBN4-385-15215-2 C3580 ¥38000E



言語学 The Sanseido Encyclopaedia of Linguistics 大辞典

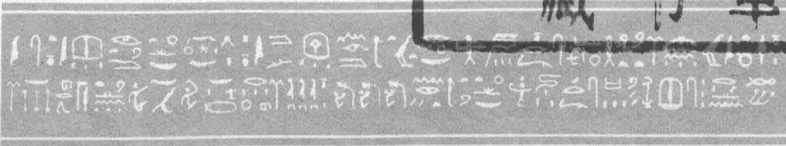


第1卷
【世界言語編】
①
あーこ



亀井孝・河野六郎・千野栄一〔編者〕

江苏工业学院图书馆
藏书章



1988年3月1日 初版発行



言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)

定価 42,000 円

発売記念特別定価 38,000 円

1988年3月1日 第1刷発行

編著者 亀井 孝 (かめい・たかし)
河野 六郎 (こうの・ろくろう)
千野 栄一 (ちの・えいいち)

発行者 株式会社 三省堂 代表者 守屋眞明

印刷者 三省堂印刷株式会社

組版 三協整版株式会社

発行所 株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目22番14号

電話 編集 (03) 230-9411

販売 (03) 230-9412

総務 (03) 230-9511

振替口座 東京 6-54300

<言語学 1 世界言語 上・1,824 pp.>

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-385-15215-2

刊 行 の 辞

言語学という学問は、まだ十分固まっているとは言えない学問である。ことに20世紀に入ってから言語学は、理論めいたものを模索しつつ、それが真の意味の理論と言えるかどうか分からないまま、やがて20世紀は去ろうとしている。実にさまざまな人がさまざまな説を述べた。ともすると各自勝手に術語を捏造し自分の説を飾って、他を顧みない傾向がある。かくて術語は氾濫し、何らそれを整理統合することがなかった。この“理論”の乱立と生煮えの術語の濫造は、言語学がまだ真の理論的基盤を獲得していないことを示すものである。

しかし、言語学の分野の中で、音論は、他の分野に比し格段の進歩を遂げた。19世紀の「歴史的」言語学のもたらした成果は、ほとんどこの音論の分野の中であった。すなわち、比較言語学の確立や、その根底になる音韻変化の規則性の原理の発見など、すべて言語の素材である音に関するものであった。

一方、文献学の中から誕生し発展した“言語学”は、文字に書かれた言語から生きている言語、話されている言語に眼を向けるようになった。話されている言語を観察し記述するには、まず、その言語の音声を対象としなければならない。音声学という言語研究の基礎的補助科学が起こってきたのは、このような要請に応えるためである。そして、音声学は、いかなる言語にも妥当する普遍的な学として、言語学の基礎を提供するように発展した。もはや、かつてヨーロッパ以外の諸国に派遣された宣教師たちの怪しげな表記に頼ることなく、世界共通の尺度を得るようになり、この新しい尺度をもって未知の言語の調査が活発に行なわれるようになった。さらに、音声学の知識の発展の結果、その知識に基づいて、それぞれの言語を形成する音の単位としての音韻を考える音韻論の発生は、それぞれの言語の記述に多大な便益を与え、その表記を簡便にした。

音論の発展は、言語学を“科学”に仕立てたかのようであった。言語にとっては音のみが(また、二次的には文字が)、我々の感覚にとらえられるものである。したがって、それは科学的に観察し、測定することができる。音声学は、そのように一つの立派な科学である。しかし、言語は音声の連続からなるが、音声の連続のみが言語をなすのではなく、音声の連続の中に顕現する一定の形が、一定の概念を喚起するところに言語が存立するのである。言いかえれば、一定の音形が一定の意味作用をもつところに言語があるのである。一方に感官に知覚される聴覚的形象があり、他方に脳中に生ずる概念作用があつて、このまったく異質の2つのもの間をつなぐのが言語であつてみれば、これを扱う言語学がはじめてから困難を負わされるのは、当然予測されることである。

言語に用いられる聴覚的形象(音形)を問題とする音論は、意味作用をなすものとしての音形を対象とし、その構造を観察し、その要素を分析する。この場合、意味は前提として背景に置かれる。すなわち、意味を直接の対象とせず、音形にもっぱら焦点を合わせる。したがって、その限りにおいて、客観的に処理することができる。

これに反し、意味の方はそうはいかない。意味をもつ音形の単位は、ふつう、語とよばれる。

言語学の本当の対象は、語であると言ってよい。語は、単独で機能することもあるが、本質的には、他の語と結びついて活かされる。語と語との関係は、その語の形に示されることもあるし、語の結びつき方に示されることもある。前者を扱う部門が形態論であり、後者を考えるのが統語論であり、この両者がいわゆる文法をなす。この文法という領域でとり扱われる現象は、すでに背景の意味に照らしてはじめて理解されるものである。しかし、文法現象は、やはり語の形態や配列という音声連続の中に顕現する形を論ずるものであるから、比較的、客観的に処置することが可能である。といっても、形はその形の使用される方法、すなわち機能によって規定されるものである以上、意味の関与する部面が必ずあり、音論のように純粋に形式的に処置することはできない。また、音論において音素という概念を導入したのにならって、形態論においても形態素という術語を鑄造したが、形態素が形態素としてなり立つのは、その形よりもその機能による。その機能には純粋に形式的な統語的機能もあるが、多くの場合、その形式的な機能に意味的な機能が加わる。一般に、意味が介入すると、物的な音のように形式的に処理することが難しくなる。

他方、語の機能は言語によってさまざまであって、必ずしもいかなる言語にも妥当するような機能が得られるとは限らない。したがって、音論における音声学のような共通の尺度は得られない。文法における普遍者(universals)の探求は今後も必要であるが、いわゆる一般文法の成立する可能性は極めて薄い。かくて20世紀の文法理論では、賽の河原に石を積む試みがくり返されているのである。

それでも、意味を背景にすえて語形の構造をみたり、あるいは、いくつかの語が形づくる文の構成を考えたりすることはできる。これが文法の主要な仕事であり、言語学の核心でもある。というのは、音論そのものはあくまでも言語の素材を論ずるものであり、言語の正体は意味作用をもつ音形にあるがゆえである。

音論の成果に自信をもった言語学は、音論の成果の類推を意味の面にも求めようとした。20世紀の言語学の始祖であるソシュールは、言語の単位を、聴覚映像(音)と概念(意味)の結合とみ、前者を能記(signifiant)、後者を所記(signifié)とする記号とした。この考えは、常識と一致する。我々は、「この語は……の意味をもつ」と言う。あたかも音と意味とが対等な関係にあり、それらが合体して1つの物をつくっているかのように言う。しかし、実際には、そのようなことはない。現実には、話し手の一定の調音活動によって発音されたものの中に一定の聴覚的な形が生まれ、それがそれぞれの社会の中で慣習的に聞き手の脳裏に一定の概念を喚起するようになっているのであって、そこにはその形に連合した意味作用(signification)があるだけで、別に、意味というものがあるわけではない。

概念だの観念だのというものは、頭の中にあるもので、音のように、客観的に観察したり測定したりできるものではない。したがって、ここに音論における音素のような単位を抽出することは許されない。世にそれができるかのように信じて意義素などという単位を設定する向きもあるが、「意味」を分析するといっても、実はそれは、意味となる概念を分析しているのである。かくていわゆる“意味論”と称するものは、はかない試みでしかない。

このように、言語学の対象である言語は、等質的な要素からなるものではない。それは、物理的なものの形而上学的な使用にある。したがって、本来、他の学問のような科学的処理に向かないものである。しかし、19世紀以来、言語学は言語の思弁的論議を排して、実証的学問たらんとしてきた。実証的であるためには、具体的な個々の言語に示される言語事実を観察し記

述しなければならない。言語学の理論は、高遠な哲理よりも、具体的な言語事実の記述の方法に関するものであるべきである。言語の本質を云々する議論は、哲学者に任せればよい。哲学者たちは、言語についてしばしばよいことを言ってくれる。しかし、多くの場合、それは記述の技術には役立たない。ソシュールが、20世紀の言語学の始祖と崇められるのも、常識的で分かりやすい、技術的な術語をいろいろ作り出したところにある。曰く、ラングとパロール、曰く、共時態と通時態、等がそれである。

このような記述の技術のための理論という点では、音論は上述のようにかなり進歩してきたが、他の分野、たとえば、文法などでは、音論のような普遍的な方法はなかなかとりにくい。というのは、各々の言語は、それぞれ固有の範疇をもっているのですべての言語に妥当するような普遍的な文法範疇は得られないからである。すべての言語を普遍的に扱うには、より多くの言語を知らなければならない。従来の文法理論は、何といても印欧語に即して考えられてきたものばかりで、他の系統ないし類型の言語について、必ずしも十分に適用できるものではない。そこで、さまざまな言語に見られる新しい言語事実を、もっと多く知る必要がある。言うまでもなく、言語理論は言語事実の正確な知識に基づいて構築されるべきものである。20世紀になってから、アジアやアフリカの一部、南北アメリカ・オセアニア等のいろいろな言語の調査が試みられ、数々の言語事実が紹介されたが、なお多くの言語が、言語学による解明を待っている。これらの言語が同じ密度で解明されてはじめて、真の意味の言語学が生まれると言っても過言ではない。

翻って日本の状況はどうであろうか。この国では、あいもかわらず欧米の新説を輸入し、これを追うことに汲々として、依然として後進性を発揮している。この器用貧乏の後進性は、どうやら宿命的なものらしい。最も不思議なのは、どこの国でも言語学の新しい“理論”を提出するには、まず自国の言語の言語事実から汲み出すのが普通であるのに、この国では、あたかも日本語は言語ではないかのごとくに、英語やフランス語、あるいはその他の言語についてあげつらっていることである。一方、その日本語は、いまだに言語学的に正当に扱われていない。いわゆる国語学は、そのまま日本語の言語学にはなっていないのである。もうそろそろ日本語に基づく言語理論が出てきてもいい頃である。

言語事実に関しては、我が国においては、第2次大戦中、アジアの国々との接触が深まるにつれ、これらの国々の言語の研究が試みられるようになった。そして、戦後も、いまだ知られなかった言語を専門に研究しようとする若い人々が段々に現われるようになった。別して、東京外国語大学に附置されたアジア・アフリカ言語文化研究所と、大阪の国立民族学博物館の設立は、アジア・アフリカ等の言語の研究の発展に資すること多大であった。本辞典の「世界言語編」および「世界文字編」に、かなり確実な言語記述を含むことができたのも、各地の大学とこれらの機関に所属する研究者諸氏の寄与に負うところがまことに大きい。このようにして、言語の知識の範囲が拡大され、言語事実の蓄積が増大していくことが望ましい。

以上のような状況の下で、『言語学大辞典』を編纂することには、いかなる意味があるのだろうか。いましばらく待って、言語学の帰趨が定まったのちに、その総括として辞典をつくるべきかもしれない。しかし一方、言語に関する知見がかなり増大した今日、それを見やすい形に展望することが、将来への飛躍に役立つことも確かである。本辞典の編纂が企画されたのは、このような趣旨からである。

顧みれば、企画立案からやがて10年になんなんとする歳月が過ぎた。思えば長く、思えば短い。企画推進に当たっての諸調査を含む準備活動、編修方針や編修要綱の策定とそのためのも度重なる編修会議、項目の選定等々、充実した日々があった。

執筆を開始して足かけ6年、執筆者ならびに編修部の熱意と意欲が企画を拡大・充実させる結果となり、巻立ては数次にわたって変遷をみた。現在、ようやくその全貌を明らかにし得た本書の構成は、4部、計6巻、すなわち次のごとくである。

世界言語編 上・中・下 / 世界文字編 (含、言語資料・総索引) / 術語編 (含、書名・人名) / 世界言語地図編

本書は、言語研究の現状に鑑み、統一のための統一を旨とはせず、編修上の制約より執筆者の意向と判断を優先させた。したがって、執筆者各位の立場や観点、研究史的背景によって、項目間に必ずしも矛盾なしとはしない。それもまた、今後の研究に課題を提供することとなる。ただし、編修部の需めに応じて比較的早期に原稿を寄せられた方々と、編修の進展に応じてより質量を広げて原稿を執筆された方々との間に、また、執筆者本人の現地調査や自らの研究に基づいて執筆された項目と、専門からやや離れた言語について世界各国の先達の研究に基づいて検討・整理された項目との間に、多少の粗密・深淺・長短のあることはやむを得ない。それが内容の質に比例することを必ずしも意味しないことはもちろんである。

ともあれ、多くの方々の歴大なエネルギーと真摯な努力によって、かつてない規模で言語研究の成果を盛り込んだ『言語学大辞典』が、今ここにその刊行を開始する。

この間、有形・無形の多面的な援助を与えられた、三根谷 徹・北村 甫・西田龍雄・南不二男・風間喜代三・上村幸雄・松本克己・土田 滋・上野善道の編修委員各位をはじめとする少なからぬ方々、ならびに、各種の困難の中で、世界各地でのフィールド・ワーク、文献研究等を含めた多くの研究成果を結実された数多くの執筆者各位、そして、本辞典の執筆を絶筆とされた故橋本萬太郎氏に、心からの感謝と敬意を表したい。

さらに、この企画の立案と推進にあたって、当初経営上の困難の中にあって本企画決定の勇断を下され、その後の曲折ある編修を終始支えられた三省堂会長上野久徳氏、および、社長守屋眞明氏をはじめとする同社の経営の任に当たられた諸氏、ならびに、企画立案から編修・集稿・校正・内容整備等に日夜献身された三省堂編修部の方々、歴大な特殊活字の作成を含む困難を極めた組版・印刷に奮闘された三省堂印刷株式会社・三協整版株式会社等々、多くの方々に本書は支えられている。ここに深甚なる謝意を表するものである。

本辞典が、言語研究の豊かな発展と、日本語学の真の前進、国際的視野へむけての日本文化の伸展・充実の礎石となることを切望する次第である。

1988年1月

言語学大辞典編修委員会

亀 井 孝
河 野 六 郎
千 野 栄 一

世界言語編の序

言語学辞典としては、この世界で話されている、あるいは話されていた言語に、どのような言語があるか、それについての情報を盛ることは必要不可欠な要件である。もちろん、現在なお、あらゆる言語についてその概要を知る段階には至っていない。いまだ十分に調査されていない言語の研究から、多くの有益な言語事実が知られるようになる可能性もある。しかし、今日の我が国において知ることのできる言語の数は、すでに案外少なくない。本辞典に、約 3,500 言語を収録することのできたことは注目すべきことである。それは言語研究者の人口の増加とともに、未知の言語への憧れが、洋の東西を問わず、種々の言語の調査へと若い研究者を赴かせた結果である。本辞典の「世界言語編」は、このような人々の真摯な協力の賜物であって、本辞典の柱の一つである。これにより、将来の言語研究のための安定した基礎が築かれるにちがいない。

「世界言語編」では、今日、直接・間接に知ることのできる言語について、その全体像の能うかぎり正確な概観を提供することを編修の方針とした。すなわち、各言語の名称（言語によっては、自称と他称の別があることがある）、その分類（系統的分類の明らかなものは、その語族・語派等、いまだ系統関係は明らかでないが同系の可能性のあるもの、あるいは、系統関係は明らかにならないが共通の類型的特点のあるもの、さらに、地理的に隣接して一括して述べるのが便利なものなどは、諸語その他としてまとめた）、それぞれの言語の現状——どの地域にどのように分布しているか、そしてそれを話す人口はどのくらいあるか——はもちろんのこと、それぞれの言語の内的な特徴——音韻・文法（形態と統語）・語彙の特徴——を最も重要視したことは言うまでもない。また、その言語が文字をもち、過去の記録をのこしている場合は、その歴史的展開の跡を概観し、さらに、その記録が文学作品である場合にも、必要に応じてその主なものに触れた。その他、その言語の研究史にも可能な限り言及した。なお、言語は、それを話す人々によって文化的ないし社会的意味が異なることがある。たとえば、今日の英語は、単にイギリスやアメリカの言語に留まらない。それは、いまや世界語の域に達しようとしている。こうしたいわゆる大言語に対して、ごく限られた地域にだけ用いられている言語もある。また、たとえばシュメール語のように、かつては古代の王国の言語として栄えた言語で、今日跡形もなく消えてしまったものもある。このような大言語も小言語も、また現在用いられている言語も死語も、言語学的な記述の対象としては全く同等の意義をもつものであり、本辞典ではこれらを差別なくとりあげた。その他、特に我々の言語である日本語と関係のある言語については、その関係を指摘することにした。

各言語の記述においては、できるだけ具体的であることを主眼とした。言語の概観ということになると、紙幅の制限などからとかく抽象に流れ、その言語の特徴を把えにくくなるきらいがある。本辞典では、各言語の特徴が概括的にせよ把握できるように、必要に応じて紙幅を提供し、具体的な用例を盛りこむように努力した。ことに、執筆者が自分自身で直接に調査を行なった言語については、その貴重な原材料を活用することを依頼した。したがって、それらの項

目はかなり長大なものとなっている。もとよりあらゆる言語についてこのようなことは望めないが、間接的に知っている言語についても、なるべく最新の情報に基づいて確実な記述を懇請した。また、英語・ドイツ語やフランス語など、すでに研究がかなり進み、多くの情報の蓄積が目につれるかたちで行なわれている言語については比較的簡略に扱い、これまで十分な記述がなされたことのない言語について、より大きな紙幅をあてるようにつとめた。

本辞典は、我が国ではじめて編修・刊行される本格的な言語学辞典であるから、我が国での過去の実績を十分に活用することも編修の一つのねらいである。日本語に焦点を合わせると同時に、やはりその地理的位置や文化的・社会的な交流関係から、日本の近隣の諸言語、すなわち、中国・朝鮮・モンゴル・ツングース・ヴェトナム・タイ・インドネシア等、東アジアおよび東南アジアの諸言語の記述に力を入れた。これらの地域の言語は、従来、我が国の言語研究者の関心の中心におかれていたので、多くの言語事実について、執筆者自身の研究も含めて実質的な蓄積があった。さらに、本辞典の執筆のために、現地調査を含め、研究を進展させることができた言語も少なくない。

一方、アフリカ・オーストラリア、あるいは南アメリカなどの、言語学としては未開拓の地域の言語に、最近、現地に赴いて調査を行なう若い研究者が出てきたことは誠に心強いことである。これらの地域を含むいくつかの地域の言語については、個々の言語の記述のほかに、その地域の諸言語の最新の研究状況を大項目として展望することも試みた。これは、これらの諸言語の将来の研究の基礎となるものである。

このようにしてここに集積されたひとつひとつの言語記述において、その系統分類のあり方や、個々の言語事実のとらえ方等をめぐって、執筆者間に判断や解釈のちがいがみられることも少なくなかった。しかし、そのような記述のずれは、それ自身が研究の現状の正確な反映であり、その意味において、それらの統一をあえて行なわない場合があった。

本辞典の「世界言語編」を今後の調査・研究の土台として、世界の諸言語の記述的研究・比較研究などが、さらなる発展をとげることを希望してやまない。

1988年1月

言語学大辞典編修委員会

亀井孝

河野六郎

千野栄一

凡 例

0. 記述の態度

0.1 記述的な研究がすすみ、資料の蓄積がよく行なわれている言語については、それにみあった詳細な記述を行なった。しかし、一方では、言語内容の具体的記述にまで立ちいることができなかつた言語も少なくない。このような項目の大小、記述の精粗は、主として、その言語に関する記述的研究の進展状況を反映している。

0.2 執筆者自身の調査研究による、豊富な第1次資料を有する言語については、その資料を存分にとりこんだ精密な記述を行なった。

0.3 これまで、まとまった記述がなされたことのない言語については、とくに十分な紙面をあてて記述するようにつとめた。

0.4 話者人口の多い、いわゆる大言語や国際語に、とくに大きな紙面をあてる方針はとらなかつた。大言語も小言語も、言語学的記述の対象としては、同等でなければならぬからである。

0.5 英語、ドイツ語、フランス語等をはじめとする、ヨーロッパの諸言語を中心において世界の諸言語を考える旧来の立場を排し、これまで等閑視されてきたアジアやアフリカ等の諸地域の言語に、大きな光をあてるようにつとめた。

0.6 とりわけ、日本語、琉球方言、アイヌ語、朝鮮語、中国語各方言、台湾の諸言語等、東アジアの諸言語については、かつてない精度と規模の記述を行なった。

0.7 さらに、アフリカ、オーストラリア、南アメリカ等、近年急速に言語学的な調査研究がすすみつつある地域に関しては、大項目を配して、それぞれの地域の言語および言語研究の実態を詳細に解析した。

0.8 関連諸項目の記述において、同一言語が異なった分類上の位置や名称を与えられていたり、同一の言語現象に対して異なった解釈がほどこされていたりする場合がある。また、項目あるいは執筆者によって、用語法や表記法が必ずしも一致しない場合もある。こうした、立場や解釈のちがいに起因する記述のずれは、それ自体が研究の現状の正確な反映であり、その意味において、それらの統一をあえて行なわなかつた場合がある。また、関連諸項目間における記述内容の重複についても同様である。

0.9 記述にあたっては、語例や文例、また、図表類を豊富に用いて、可能な限り具体的であるようにつと

めた。

0.10 執筆者名を、項目の末尾に示した。

1. 見出し形

1.1 世界の諸言語の名称を、主としてカタカナに翻字して、五十音順に示した。

1.2 ただし、中国語各方言や、チベット・ビルマ語派、タイ諸語、ミョオ・ヤオ諸語、ツングース諸語、モンゴル諸語等に属する諸言語は、漢字で見出しをたてて、その読みを付記したことがある。

例) 羌語(きょうご)、閩語(びんご)

1.3 見出しには、主として個別の言語をとりあげたが、一部の方言や、分類上の位置にかかわる名称、すなわち、語族、語派、語群、小語群、方言群、諸語等も、必要に応じてとりあげた。

1.4 現在用いられている言語のみならず、過去の言語(いわゆる死語)もとりあげた。

1.5 エスペラント語、イド語をはじめとする、いわゆる国際補助語は、「術語編」で扱った。

1.6 言語名としては、「語」をつけた形を見出し形とすることを原則としたが、「語」をつけない形で用いるのが普通の場合には、つけなかつた。また、慣用として、両方の用い方があるときは、「語」を()に入れて示した。

例) サンスクリット(語)

1.7 カタカナへの翻字は、「外来語の表記」(昭和29年3月国語審議会報告)をひとつの目安としたが、必ずしもそれにとらわれることなく、現在の慣用にも十分留意するようにつとめた。

1.8 カタカナ表記のゆれがいちじるしい場合は、どの異表記からでも引けるよう、別に空見出しを設けた。

例) ベトナム語(空見出し) = ヴェトナム語

サルジニア語(空見出し) = サルデーニャ語

カシミール語(空見出し) = カシュミール語

1.9 インド語派およびイラン語派に属する諸言語のカタカナ表記は、地名に「語」をつけた形を見出しとすることを原則としたが、現地音にもとづく言語名表記も、別に空見出しとして掲げた。

例) ベンガリー(語)(空見出し) = ベンガル語

カシュミリー(語)(空見出し)

= カシュミール語

1.10 慣用として広く用いられる異称も、可能な限り空見出しとして掲げた。

例) エトルスク語(空見出し) = エトルリア語
 古典エチオピア語(空見出し) = ゲズ語
 カウィ語(空見出し) = 古ジャワ語
 ジブシー語(空見出し) = ロマーニー語

1.11 これまで一般に用いられてきた、他称による言語名を空見出しとし、自称による言語名を本見出しとした場合がある。

例) オロッコ語(空見出し) = ウイルタ語
 ラップ語(空見出し) = サーミ語

1.12 見出しとしてとりあげなかった異称(自称、他称)、異綴り、方言名、民族名なども含む、言語・民族名索引を下巻末に収載して、読者の検索の便たらしめた。

1.13 空見出しの参照先は、2種類の記号を用いて区別して示した。

→: 矢印の先の項目に、その言語についての記述が含まれていることを表わす。

=: イコールで結ばれた両者は、同一言語の異称であり、イコールで示された項目で、具体的な解説がなされていることを表わす。

1.14 見出しは、長音記号「ー」および漢字「語」は無視して、五十音順に配列した。

1.15 カタカナでは同一表記になる見出しは、見出し形の右肩に小さく1, 2, 3の数字を付して、それぞれ別見出しとした。

例) カカ語(方言群)¹ 英 Kaka, Kaka dialect cluster

カカ語² 英 Kaka

カカ語³ 英 Kaka

なお、同一かな見出しで原綴りが異なる場合は、そのアルファベット順に配列した。

例) グワ語¹ 英 Guwa

グワ語² 英 Gwa

2. 原綴りと原籍の表示

2.1 見出し形の直後に、その見出し形に対応する原綴りと原籍を示した。

2.2 その言語の研究に関連の深い各言語による綴りを、必要に応じて、原則として、以下の順に並べて示した。

自称、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、その他の言語

2.3 自称による綴りの場合は、原籍の表示は行なわなかった。なお、自称の綴りを本文の記述中で示した場合がある。

2.4 原籍は、上の英、独、仏、露、西と、伊(イタリア語)、蘭(オランダ語)、中(中国語)は漢字による略称で、その他はカタカナで示した。

2.5 原綴りは、第1字を、英、独は大文字で、仏、西、露は小文字で示した。ただし、英語による綴りと他言語による綴りが同形の場合には、簡略化して、英語による綴りのみを示すことを原則とした。

2.6 中国語による表記は、漢字のあとのカッコ内に、それぞれに対応する拼音を示した。なお、中国語の表記に用いる漢字は、本文の記述も含め、簡体字や繁体字ではなく、日本における通用の漢字を用いることを原則とした。

2.7 その言語名のもっとも一般的なローマ字表記を、便宜上、英語による表記として示した場合がある。

2.8 何語による綴りであるか判定しがたく、あえて原籍を表示しなかった場合がある。

3. 本文

3.1 見出しに掲げた言語の、名称、系統、分類、分布、人口、音韻、形態、統語、方言、語彙、語史、研究史、作品等を、可能な限り最新のデータを用いて記述した。

3.2 大項目、中項目には、適宜、上記の内容に対応した小見出しを設けることを原則とした。なお、それぞれの言語の研究事情に応じて、言語構造以外の文化的、社会的、歴史的な背景等に関する記述を「概説」としてまとめたり、「形態」と「統語」を「文法」としてまとめたり、さらには「音韻」と「文法」を「言語特徴」としてまとめて記述したことがある。小項目には、原則として小見出しはつけなかった。

3.3 語族、語派、語群、諸語等の分類上の名称を、本文中では慣用的に簡略化した形で用いることがある。たとえば、アフロ・アジア語族、ケルト語派、チュルク諸語、ロマンス諸語に属する個々の言語を、それぞれアフロ・アジア語、ケルト語、チュルク語、ロマンス語などよぶ類である。さらに、たとえば、ドラヴィダ語族に属する諸言語を、まとめてドラヴィダ諸語などよぶ場合もある。

3.4 分類の方法によっては、語族の中に別の語族が、諸語の中に別の諸語が含まれることがある。

例) オーストロアジア語族の中のモン・クメール語族

カフカース諸語の中のカルトゥベリ諸語

3.5 本文中の言語名には、本辞典に見出しとしてとられていないものについて、その項目の初出個所にカタカナ表記とその原綴りを示すことを原則とした。なお、見出しにとられている言語名については、その項目の初出個所も含め、カタカナのみで表記した。

3.6 本文中の民族名、人名、地名には、その項目の初出個所にカタカナ表記とその原綴りを示し、2回目以降はカタカナのみで表記した。

- 3.7 音論に関する記述には、国際音声字母 (The International Phonetic Alphabet, 略称 IPA) を用いることを原則としたが、各言語の研究史的な慣用にしがわざるをえなかった場合が少なくない。なお、IPA の音声表を、本巻の後見返しに掲出した。
- 3.8 文字に関する具体的な記述は、「世界文字編」で扱った。
- 3.9 本文中の引用文献は、「参考文献」欄に記載のないものは、記述中にその著者名、論文名(書名)、出版社、刊行年などを示し、「参考文献」欄に掲げられているものについては、著者名と刊行年のみによる略式の表示を行なうことを原則とした。
- 例) サビア (E. Sapir, 1930)
 メイエとコエン (A. Meillet et M. Cohen, 1952)
- また、本文中で論文名や書名を省略形によって示した場合があるが、その場合は、「参考文献」欄に全形を掲げるようにした。
- 3.10 項目末の「参照」欄とは別に、本文中、そこで話題になっている事柄についての参照項目を、カッコ内に→で示した。
- 3.11 本文中の略語は、特殊なものについてはその項目内で、一般的なものについては凡例で説明することを原則とした。後出の略語一覧を参照されたい。
- 3.12 言語名の略称は、各項目の記述中で説明した。
4. 辞書
- 4.1 これまでに出版されたその言語に関する辞書のうち、代表的なものを精選して示した。
- 4.2 学習・研究向きのすぐれた辞書や、研究史的に重要な意義をもつ辞書を取りあげてことを主眼としたが、必要に応じて、語源辞典、古語辞典、外来語辞典、百科辞典等の特殊辞書もとりあげた。
- 4.3 その言語自体による辞書ばかりでなく、二言語対照辞典もとりあげるようにした。
- 4.4 簡略な語彙集の類は、原則としてとりあげなかったが、語彙集ではあっても、実質的に辞書としての内容を備えているものについては、辞書としてとりあげた場合がある。
- 4.5 内容的に不十分な辞書ではあっても、それが、その言語に関する唯一の辞書である場合には、その辞書を取りあげて示すことを原則とした。
- 4.6 語族等の、上位レベルに属する項目では、比較言語学的な観点から編まれた比較辞典の類をとりあげた。
- 4.7 掲示した辞書のそれぞれについて、その特色を、ごく簡略に解説するようにつとめた。
- 4.8 書誌的なデータの記載は、後述の参考文献の記載

法に準じた。

5. 参考文献

- 5.1 その言語に関する参考文献の中から、学習や研究に有益なすぐれた文献、研究史的に重要な意義をもつ文献を精選して示した。
- 5.2 その言語の全体像を概観的にとらえた文献をとりあげてことを主眼とし、個別的な言語現象をテーマとした特殊文献は、原則としてとりあげなかった。
- 5.3 参考文献の選定は、執筆にあたって利用した文献という観点ではなく、これからその言語を学習したり研究したりする上での必読の文献という観点から行なった。ただし、その言語の研究状況によっては、両者は、事実上、一致することが少なくない。
- 5.4 参考文献は、著書、雑誌論文の別なく示した。
- 5.5 その言語自体による文献ばかりでなく、他の諸言語による文献もとりあげた。
- 5.6 著者名、刊行年、書名、シリーズ名、出版社、出版地のデータを、この順序で記載した。雑誌論文の場合は、著者名、刊行年、論文名、雑誌名、巻数、号数、出版社(発行機関)、発行地のデータを、この順序で記載した。ただし、雑誌については、出版社(発行機関)や発行地の記載を省略した場合がある。また、単行本収録論文の場合は、著者名、刊行年、論文名、編者名、書名、シリーズ名、出版社、出版地の各データを、この順序で記載した。
- 5.7 同一著者が同一年に刊行した複数の著作を表示する場合は、刊行年の後に、a, b, cなどを付して区別した。
- 5.8 復刻版や日本語訳のある文献は、できる限りそれを示すようにつとめた。また、第2版以降の版、およびその刊行年は、刊行年の右肩に版数を添えて表示することを原則とした(例:1968²)。
- 5.9 欧文文献中、漢字の該当する著者名には、欧文スペリングのすぐ後に、[]を用いて、可能な限り漢字表記を補入した。
- 5.10 中国語文献中の漢字は、本文と同様、簡体字や繁体字ではなく、日本における通用の漢字を用いることを原則とした。
6. 参照
- 6.1 項目末に、必要に応じて参照項目をおき、その言語をよりよく理解するための補助情報(周辺地域の諸言語分布図、近縁諸言語の系統分類表、研究史、言語特徴等)の所在を示した。
- 6.2 相互に関連した複数の項目間で、記述の重複をさけるために、内容の書き分けを行なった場合が少なくない。このような場合は、参照によって、単なる

補助情報の範囲にとどまらない、必要情報の所在を示した。

7. 使用記号一覧

本書で使用した主な記号類の用法は、大略、以下のとおりである。なお、ここにあげられていない特殊な記号類については、本文中の該当個所にそれぞれ説明を付した。

- () 言語名, 民族名, 地名, 人名, 書名の原綴り
その部分省略可能
文例の提示
文例の逐語訳
一般に, 補足的説明
- [] 略称, 略語
文法的機能
一般に, () に準じる補足的説明
- [] 項目中の小見出し
- [] 発音表記
- / / 音素
- { } 形態素
- < > 図表の指示
- < > 一般に, 語句の強調など
- < > 小見出しの中の区分け
文法的機能
- 「 」 語例, 文例の日本語訳
日本語, 朝鮮語, 中国語による論文名
一般に, 強調や特定の術語などの指示
- 『 』 日本語, 朝鮮語, 中国語による書名, 雑誌名
- ‘ ’ 語例, 文例の英語訳
一般に, 強調
- “ ” 欧文による論文名
一般に, 強調
- ~ (音韻論的条件によって決まる)異形態生没年などのつなぎ
一般に, 省略語句の代用
- ∞ (形態論的条件によって決まる)異形態語根
- √ 語根
- >, < 語形変化, 派生
- , ← 語形変化, 派生
- 参照項目の指示
- ⇒ (表中での)参照の指示
- = 参照項目の指示
- /, / 音韻や形態の対立, 交替, 択一
- … (文例中の)省略語句の代用
- ∅ ゼロ要素 (主として形態素)
- # 語の境界

- ∅ ゼロ要素 (主として形態素)
- + 形態素の境界
- :
- 語例や文例の例示
- * (左肩) 再構形 (再建形)
- * (右肩) 注
- 接辞
形態素間の区切り (欧文)
原綴りの分綴
- 形態素間の区切り (和文)
文献の刊行年などのつなぎ
- 形態素間の区切り (欧文, 和文)
人名等のカタカナ表記の区切り
一般に, 並記
- = 人名等のカタカナ表記の区切り
- イタリック体活字 欧文による書名, 雑誌名
(文例中の)語句の強調や指定

8. 略語一覧

本書で使用した主な略語は、大略、以下のとおりである。なお、言語名の略称については、本文中の該当個所にそれぞれ説明を付した。

- A adverbial
- abbrev. abbreviation
- abl. ablative
- abs., absol. ①absolutive, ②absolute
- Abt. Abteilung (独)
- acc. accusative
- A.D. Anno Domini (=in the year of our Lord)
- adj. adjective
- adv. adverb
- aor. aorist
- approx. approximate(ly)
- art. article
- aux. auxiliary
- B.C. before Christ
- Bd. Band (独)
- Bde. Bände (独)
- C ①complement, ②consonant
- ca. circa
- caus. causative
- cf. confer
- chap. chapter
- comp. ①compound, ②comparative degree
- compar. comparative degree

cond.	conditional	No., Nos.	number(s)
conj.	conjunction	nom.	①nominative, ②nominal
dat.	dative	NP	noun phrase
der., deriv.	①derivative, ②derivation	N.S.	New Series
dl.	dual	O	object
do.	ditto	p.	past
ed., eds.	editor(s)	p., pp.	page(s)
e.g.	exempli gratia(=for example)	pass.	passive
encl.	enclitic	perf., pf.	perfect
esp.	especially	pers.	person
et al.	et alibi (=and others)	pl.	plural
etc.	et cetera (=and so on)	plt., pt.	plate
ex.	example	poss.	possessive
excl.	exclusive	p.p.	past participle
f.	feminine	pref.	prefix
fasc.	fascicule	prep.	preposition
fig.	figure	pres.	present
fut.	future	procl.	proclitic
gen.	①genitive, ②general	pron.	pronoun
ger.	gerundive	pronom.	pronominal
Hrg., Hrsg.	Herausgeber (独)	Pt.	part
hrsg.	herausgegeben (独)	pt.	participle
ibid.	ibidem (=in the same place)	rep., repr.	reprint
i.e.	id est (=that is)	rev.	revised
impf.	imperfect	rt.	root
incl.	inclusive	S	subject
ind.	indicative	ser.	series
inf.	infinitive	sg.	singular
inj.	injunctive	suf.	suffix
inst.	instrumental	Suppl.	supplement
inter.	interrogative	t.	tome (仏)
intr.	intransitive	tl.	trial
IPA	The International Phonetic Alphabet	tr.	①transitive, ②translation or translated by
l., ll.	line(s)	V	①verb, ②vowel
lit.	literally	voc.	vocative
loc.	locative	Vol., Vols.	volume(s)
m.	masculine	VP	verb phrase
mimeo.	mimeograph	vs.	versus
MS., MSS.	manuscript(s)	Изд.	Издательство (露)
N	noun	ред.	①редактор (露), ②под редакцией (露)
N°	numéro (仏)	т.	том (露)
n., neut.	neuter	тт.	в... томах (露)
n.d.	no date		
neg.	negative		

「世界言語編」執筆者一覽

青木 晴夫	黒川 洋	千野 栄一	西田 龍雄	水谷 宏
麻田 豊	黒沢 直俊	塚本 明廣	野元 菊雄	溝上 富夫
荒木 浩	桑原 恭子	柘植 洋一	倍賞 和子	三谷 恭之
家本 太郎	小池 佑二	辻 伸久	橋本 郁雄	峰岸 真琴
池上 二良	河野 六郎	土田 滋	橋本 萬太郎	宮岡 伯人
石井 溥	児玉 望	角田 太作	服部 健	宮島 達夫
岩本 裕	小原 雅俊	津波古 敏子	林 徹	村田 郁夫
上田 和夫	小松 英雄	津曲 敏郎	林 史典	森野 宗明
上村 幸雄	坂田 貞二	寺崎 英樹	原 誠	八杉 佳穂
内田 紀彦	坂本 恭章	寺村 秀夫	稗田 乃	藪 司郎
内堀 基光	崎山 理	土居 敏雄	蛭沼 寿雄	山口 佳紀
梅田 博之	桜井 隆	徳永 宗雄	福島 治	山田 幸宏
江口 一久	佐竹 秀雄	徳永 康元	福田 唯史	山本 昭
大江 孝男	佐藤 純一	鳥羽 季義	古田 東朔	山本 富啓
大久間 慶四郎	佐藤 知己	富田 健次	細川 弘明	山本 文明
大島 稔	塩田 洋子	富盛 伸夫	堀井 令以知	湯川 恭敏
大平 陽一	柴田 紀男	内藤 雅雄	前田 富祺	吉岡 治郎
小田 真弘	島袋 幸子	直野 敦	町田 和彦	吉川 守
加賀谷 良平	清水 紀佳	中川 裕	町田 健	吉田 豊
風間 喜代三	庄垣内 正弘	中嶋 幹起	松下 周二	早稲田 みか
梶 茂樹	庄司 博史	中島 由美	松田 伊作	和田 正平
加藤 正信	秦 宏一	中野 暁雄	松村 一登	和田 祐一
上岡 弘二	新谷 忠彦	長野 泰彦	松本 克己	渡辺 実
亀井 孝	杉田 洋	長神 悟	三上 直光	渡部 重行
狩俣 繁久	杉戸 清樹	中村 尚司		
北村 甫	鈴木 斌	中山 恒夫	Karen M. Booker	
木村 建夫	鈴木 丹士郎	長與 進	Dileep Chandralar	
木村 秀雄	高階 美行	奈良 毅	Juha Janhunnen	
熊本 裕	高塚 洋太郎	縄田 鉄男	Robert L. Rankin	
栗林 均	高橋 俊三	西 義郎	Kenneth Miner	
栗原 成郎	田村 すず子	西江 雅之		

序 説

1. 「世界言語百科」の歴史

伝達をその主な機能としている言語なるものがこの地球上に複数存在する、しかも、それが若干というような数ではなく、何千という単位で存在するという事は、考えてみれば実に不思議なことである。合理性、経済性を重視する現代においては、稀有な現象ですらある。この地球上の言語が1つではなく、いくつもあるということは、言語学が成立するはるか以前から気づかれており、その事実を合理的に説明しようとする試みがなされている。そのもっとも有名な例が、旧約聖書の「創世記」にあるバベルの塔の物語で、この話は實質上、言語の一元説を示唆している。言語が一元であったか、多元であったかを知ることは、現在の科学の力をもってしては、いかんともしがたい。しかし、古典古代においても、言語の数が多きことはすでに明らかに知られており、たとえば前5世紀の歴史家ヘロドトスには、数多くの民族についての記録がある。また、西暦紀元前後に出たギリシアの歴史家・地誌家ストラボンの地理書には、ところどころに多言語に関する記述が見られる。

中世後期になって、ヨーロッパ人が、航海により、あるいは内陸探検により、ヨーロッパ以外の地に進出するようになると、これまで限られていたヨーロッパ以外の言語の知識が豊かになり、数多くの言語を、何らかの基準によって整理しようという機運が起こってくる。しかし、このような機運が高揚をみたのは、18世紀の末になってからである。まず、スペイン人のロレンソ・エルバス・イ・パンドゥロ (Lorenzo Hervás y Panduro, 1735~1809) がイタリア語で書いた『宇宙の理念』 (*Idea dell' Universo*) の第17巻『今までに知られたる言語のカタログ、及び、その相互の親近性と相異性についての覚書』 (*Catalogo delle lingue conosciute e notizia della loro affinità e diversità*, 1784) が現われ、それがこの傾向の出版の口火を切った形となっている。この書は、本人によって間もなく改訂増補されたスペイン語版が出ているが、『今までに知られたる諸民族の言語のカタログ、並びに、その言葉と方言の多様性の数、区分及び分類』 (*Catálogo de las lenguas de las naciones conocidas y numeración, división y clases de estas según la diversidad de sus idiomas y dialectos*, 1800-04) と題されたこの版には、約300のアジア、アメリカ、ヨーロッパの言語がとりあげられている。

この書の初版と第2版の間に出版されたのが、ロシ

アのエカチェリナ2世 (Екатерина II, 1729~96) の命により、ペーター・ジーモン・パラス (Peter Simon Pallas, 1741~1811) がその第1部を完成した『欽定全世界言語比較語彙』 (*Linguarum totius orbis vocabularia comparativa, augustissimae cura collecta*, 1786) で、ここには、アジア (149)、ヨーロッパ (51) の合わせて200の言語 (方言) がとりあげられている。この書も、5年後の1791年には改訂され、アメリカ、アフリカの言語を含む272言語 (方言) が採録された新版が出ている。この大著 (全4巻) の内容は、単語のリストであって、しかも不正確な記述が多かったため、その評価は、ロレンソ・エルバス・イ・パンドゥロのものよりむしろ低い。とはいえ、出版当時は大センセーションをまき起こし、言語研究への関心を高めたことは評価されるべきである。

この種の博言集で、もっとも有名なものが、ヨハン・クリストフ・アーデルンク (Johann Christoph Adelung, 1732~1806) の『ミトリダーテース、あるいは、500にも及ぼんとする言語や方言について「主の祈り」を言語見本としてあげたる言語概説』 (*Mithridates oder allgemeine Sprachkunde mit dem Vater Unser als Sprachprobe in beynahe fünfhundert Sprachen und Mundarten*, 1806-17) で、全4巻のうち、アーデルンクが完成したのは最初の2巻だけである。第3巻と第4巻は、ヨハン・ゼヴェリーン・ファーター (Johann Severin Vater, 1771~1826) の手によっている。しかし、この大著にも大きな欠陥があり、とりわけ、「主の祈り」をテキストとしてとりあげた点が、大きな失敗であった。古代ポントス国のポリグロットの王として知られるミトリダーテース (Mithridátēs [より正しくは、Mithradátēs] VI Eupatór Dionýsos, B. C. 121~64) の名を冠したこの本は、数多くの言語を収集するという作業は行なったものの、そこには分類の基準はなく、言語の配列がただ地理的になされているだけで、結局、言語学成立以前の一大大モニュメントとして評価されているにすぎない。

この後に出版された同種の言語集としては、ハインリッヒ・ユリウス・クラップロート (Heinrich Julius Klaproth, 1783~1835) の『アジア博言集』 (*Asia polyglotta*, 1823) があるが、これは、その名の示すように、対象とされた言語はアジアのものに限られている。

数多くの言語を集めたこれらの書物が、あいついで

出版された同じ 18 世紀末に、言語学史上重要な意味をもつウィリアム・ジョーンズ (William Jones, 1746~94) の「インド人について」という講演がなされ (1786 年 2 月 2 日)、これ以後、言語に関する関心は、インド・ヨーロッパ比較言語学を通して、言語の科学である言語学へと発展していったのである。

100 年余に及ぶ比較言語学の時代を通じて、言語の分類に比較言語学的見地からの分類が可能になると、この見地からの言語の分類によって世界の諸言語を分類した。はじめての科学的言語百科が現われてくる。2 人の優れた言語学者アントゥアヌ・メイエ (Antoine Meillet, 1866~1936) とマルセル・コエン (Marcel Cohen, 1884~1974) による『世界の言語』(*Les langues du monde*, Librairie Ancienne Edouard Champion, Paris, 1924, 1952²) がそれで、實質上、このような世界言語百科は、それまで他には存在していない。これは、比較言語学が確立した方法にもとづいて世界の言語の分類がなされた、最初の例である。

この『世界の言語』は、他に類書のないこともあって広く言語学界で採用され、第 2 次世界大戦後の 1952 年には、新版が出版され、現在、フランスの言語学会が中心となって、その改訂版が用意されつつあると伝えられている。

日本において、世界の諸言語を概観することを目的として出版された最初の書物が、このメイエとコエンによる *Les langues du monde* の翻訳であったことは偶然ではなく、当時存在していたこの種の書物の中では、これが唯一の学術的な著作であったからである。故泉井久之助を中心とする 14 人の訳者が分担して翻訳にあたった、このアントゥアヌ・メイエ、マルセル・コエン (sic) 編『世界の言語』(朝日新聞社, 1954) は、その第 1 版を根幹として、第 2 版の一部を訳し加えてつくられた訳書である。

このメイエとコエンの訳書とほぼ同時期に、(より正確にいえば、上巻は 1952 年に、そして、下巻は 1955 年に) 出版されたのが、市河三喜・高津春繁・服部四郎共編の『世界言語概説』(全 2 巻, 研究社, 東京) である。この労作は、日本の言語研究者の手になるはじめての世界の言語の概説書として記念すべき作品であり、他書にはない優れた特徴もあって、以後、広く読者の要求を満たし、その上巻は、1986 年には 16 版にも及んでいる。

今回上梓する『言語学大辞典』の「世界言語編 (全 3 巻)」は、このような「世界言語百科」の歴史の流れの上にあるものである。しかし、そのすべてが日本の言語研究者の手によって執筆されている点では、わずかな例外となる言語を除いて、『世界言語概説』と同じであるが、『世界言語概説』が、当時、日本にその言語の専門家のいた 30 余の言語に限って、1 項目に多くの

ページをさく重点主義的編集方針であったのに対し、この「世界言語編」は、現在知られている限りの言語を項目としてとりあげようとした点で、根本から異なっている。そして、日本に専門の研究者のいる言語に関しては大項目主義をとり、とりわけ日本語および日本が研究の中心になっている東アジア等の諸言語については、十分なスペースが与えられている。とはいえ、言語の数と比べて日本の言語研究者の数が少ないことも事実である。この点は、日本だけではなく、他の国々においても事情は同じであり、いずれの日にか全世界レベルでの国際協力が可能になったとしても、依然として残る課題であろう。そこで、このような専門研究者のいない言語の場合には、次善の策として、研究分野の近い研究者、たとえ専攻でなくともその言語に知識をもつ研究者に執筆を懇望した結果が、3,500 を超す、これほど多くの項目を収録できた理由の 1 つである。

この『言語学大辞典』では、「世界言語編」においても、項目の配列は、アイウエオ順によっている。これは、比較歴史言語学の成果にもとづいた語族別の分類では、数多くの項目を整理するには不便であり、また、系統の解明がまだ十分にされていない場合が多いからである。しかし、いうまでもなく、比較言語学の成果は十分にとり入れてあり、語族や語派レベルについては、別に項目を立ててある。また、個々の言語の記述にあたっては、系統の分かる限り、その事実について触れている。

第 2 次世界大戦が終わってすでに 40 年余が過ぎ、この間に蓄積された諸言語に関する知識は、厩大なものとなっている。かつては立ち入ることのできなかつた地域の調査が可能になり、これまで知られていなかった言語が、次々と知られるようになってきている。これまでの世界の諸言語についての知識は不十分となり、新しい総合的な労作を待望する声が、世界中からわきおこっている。現在、数多くの国々で、この「世界言語編」と類似の作業が進行している。やがて、世界中で一斉に類書が出版されることになるであろうが、本書は、その先頭をきるものである。そして、それぞれ重点とする地域を異にする類書が出そろったとき、言語についての知識はさらに一歩大きく前進することになるであろう。

2. 言語の数

この地球上にはいったいどれだけの数の言語が存在するのか、というのは、ごく素朴な疑問といえよう。かつてフランスのアカデミーが、世界の言語の数を 2,796 と数えたといわれるが、それ以来、大体 3 千というのが、通俗言語学書にあげられている数字である。ところが近年になって、これまで調査のゆきとどかなかつた地域の調査が進むにつれ、予想される言語の数